インタビュー

一柳　慧先生

―― 今日は先生の辿られた道について，ざっくばらんにお伺いしたいと思います。さて，先生のお生れになったのは，いつでいらっしゃいますか？

一柳　昭和８年です。

―― 音楽教育はいつごろから受けられたのですか。

一柳　そうですね，５つぐらいからピアノをやりました。戦争末期の２年ぐらいは中断しましたが。

音楽的環境に恵まれて――

―― 御両親様も音楽関係の方でいらしたのですか。

一柳　ええ，母がピアノ，父がチェロをやっていました。

―― では音楽的雰囲気というようなものが初めからおありになったんですね。

一柳　そういう事になりますか。

―― ピアノは，初めはお母様から手ほどきを受けられたのですか。

一柳　そうですね。

―― すると始めはどんな曲をなさいました。
やはりバイエルからですか。

一柳　ええ，そうだったと思います。

―― いつ頃終わったか覚えていらっしゃいますか。

一柳　そうですね……。７，８才ごろまでは比較的進むのが早い方だったと思います。というのは母がピアノを教えていましたので小さい頃からそういった曲をしょっちゅう聞いていたでしょ。

―― じゃあバッハのインヴェンションなんかいつ頃…

一柳　正確には覚えていないけど８つぐらいですか。

御両親様のこと

―― ところで，先生のお母様はどこで教育を受けられたのですか。

一柳　母はアメリカへ行ってたんです。オハイオ州のオベリンカレッジに。

―― そうですか。しかし先生のお母様のお家はよほど裕福だったんでしょう。あの当時アメリカへ留学なさるということは，大変なことですよ。

一柳　私が物心のついてからはづっと貧乏ですけどね。

―― しかし女性で，しかもあの頃アメリカへ単身留学するということは，それだけでも大変ですよね。きっとそのパイオニア精神を先生も受けつがれたのですね。

一柳　さあ，それはどうか……。

―― お父様も留学なさったそうで。

一柳　ええ，パリへ。

―― チェロというと，オーケストラか何かにお入りになっていらっしゃるのですか。

一柳　いえ，父は我が儘でしてね，全然入っていないんですよ。今，家で教えているらしいですが。なにしろおやじとは生活態度がまるっきり違うから一緒に住んでいないんですよ。（笑）

―― さてそうした御両親様の元で成長された先生ですが，他にどんなピアノの先生に付かれたのですか。

一柳　戦後はいろいろな先生を遍歴しましたね。その中で一番長かったのは**原智恵子先生**です。

―― 原先生のお弟子さんは先生お一人ぐらいでしょ。

一柳　ええ，あの先生はお弟子をとらなかったみたいですね。

―― その原先生のお弟子さんになられたというのは，どういう訳だったと思いますか。

一柳　私が作曲家志望で変わっていたということでしょうね。そして，私にとってはもっとも尊敬できる先生だったことは確かです。それに父と知り合いだったこともあります。そんなに深いお付合ではなかったようですが原先生もパリが長かったでしょ。

原智恵子先生の始めてのレッスン

―― どなたにつれて行かれたのですか。

一柳　父ですね。13才の時です。

―― 最初の時のこと，覚えていらっしゃいますか。

一柳　ええ。とにかくその時一番印象に残っているのは技術的なことは一際おっしゃらなくて，音楽的なことだけをおっしゃられたということです。私も原先生の前に，随分いろいろな先生に付いたのですけど，それまでの先生というのはどちらかと言うと，技術的なことをうるさく言われるタイプだったんですね。もちろん技術は基礎的なこととして大事なことなんですけど原先生の場合もっと音楽の本質みたいなことをずばっと言われたんですよ。それでびっくりして尊敬してしまったわけです

原先生のこと

―― 印象強かったんですね。

一柳　ええ。それで私がアメリカへ留学する（大学１年の時）までづっと教えていただいたのです。

―― そうですか。なにか聞いた話によりますと，原先

生はとても情熱家だとか……。

一柳　非常に情熱的ですね。レッスンの時間だって，食事を間にはさんで4時間ぐらい続くこともありましたよ。音楽に打込んでおられるということが，ひしひしとこちらに感じられましたね。

——　どういった傾向のものを学ばれました。

一柳　かなり幅が広かったと思います。

——　例えばフランスものですか。

一柳　そうバッハからラヴェルまで，とくにバッハは毎回欠かさずにやりましたね。

——　一番吸収されたものは何ですか。

一柳　私も小さかったから，先生の全部を吸収できたとは思いませんが，ピアノを習っているというよりも，先生と二人で音楽をわかちあっている，といったような感じでしたね。

——　とてもしあわせでしたね，その点先生は。

作曲家としての出発

——　ところで先生，今，先生の肩書は作曲家ですよね。ピアニストは書きませんでしょ。

一柳　外国ではコンポーザー・ピアニストと書くこともありますが。

——　作曲家になる素地というのはご自分でいつ頃からあったと思いますか。音のデッサンなんかいくつぐらいから。

一柳　小学校を出たぐらいですか——。学んだということはないですが。

——　じゃあ，子供がお絵かきをするような気分で。

一柳　そうですね，割と自発的に。

——　本格的に勉強されたのはいくつぐらいから。

一柳　少しやり出したのは15〜16才ですか。

——　一番最初学ばれた先生は。

一柳　平尾貴四男先生です。

これもまあ，父の関係からですがまもなく池内友次郎先生に変りました。

——　どういうことを学ばれたのでしょう。

一柳　まあ作曲の基礎的なことですね。和声とか対位法とか。

16才でコンクール一位

——　先生は毎日音楽コンクール作曲部門で優賞なさっていらっしゃいますけれど，おいくつの時でした？

一柳　16才の時です。

——　そんな年で入っちゃったんですか。

一柳　入っちゃったんですよ。どういう訳か。(笑)その時の課題曲はピアノソナタだったんです。室内楽部門でしたから。

アメリカで得たもの

——　それでアメリカへ行らしたのですね。

一柳　ええ，初めはフランスへ行く予定だったんですが急にアメリカの方から話が来て，それが確実になったもんですから。で父の意見なんかからも，これからはアメリカの方が発展性があるだろうということで乗り変えてしまった訳なんです。

——　初めはどちらへ行かれたのですか。

一柳　ミネアポリスにある大学の音楽部です。そこから招待という形だったので……。

——　スカラシップをお受けになっていたのですね。

一柳　そうです。

——　都合何年ぐらいいらしたんですか。

一柳　出たり入ったりしていますが，そう7年ぐらいですね。

——　ミネアポリスの次はどこへ行かれたのですか。

一柳　ニューヨークです。

——　アメリカで学ばれたことといったらどんなことですか。

一柳　オリジナルということと開放的であるということでしょうか。ちょうどアメリカも戦後で文化の高揚期だ

お　便　り　その1

リリー・クラウス先生を囲む会に出席して

大縄英子さまより（日立市）

6月4日のクラウス先生のパーティー，大変御苦労様でした。私共田舎ものには圧倒されてしまってどぎまぎの連続でした。——中略——また，思いもかけず助川敏弥先生に私どもで9月に行う予定の演奏会の1つである先生の作品の，ポイントともいうべき個所を直接うかがえた事など，とても意義がありました。

2，3日は"興奮"状態で仕事も手につきません。今後も福田先生には，バスティーン・メソードについて特にきびしい御指導を仰ぎたいと思います。

また，いつも自分を失わないよう勉強を続けて行きたいと思いますので，夏期研修会にも参加したいと思っております。

左に見えるのは，助川敏弥氏　後むきは，深沢亮子氏

ったわけでそれまではヨーロッパ音楽を吸収するだけだったものがこの頃からアメリカ独自の音楽を生み出しはじめているんですね。50年代ごろですが……そういう刺戟のある環境でしたので良かったと思います。

―― そうした環境の中でお仕事もなさっていたのでしょう。どんなことを……。

一柳 大学で教えていたこともありますし，ヴァイオリンチェロ奏者と合奏もずい分やりました。そのほか作品の発表会や，日本の伝統音楽と現代音楽の講演など，いろいろですね。

日本に帰って

―― そうした意義あるお仕事を向こうでなされた後，日本に帰られてからのご活躍は？

一柳 20世紀音楽研究所のフェスティヴァルで，アメリカ作品の紹介と自作品の発表，草月アートセンターの協力でジョン・ケージの招聘，演奏家集団ニュー・ディレクションの設立，マース・カニングハム舞踊団の招聘を行ない，現代音楽祭オーケストラ・スペースの開催，万国博での音響と音楽設計や演出，ソニービルで行なった音の展覧会，サウンドデザイン展の開催，クロストーク・インターメディアへの参加，７人の作曲家によるグループ・トランソニックの結成，雑誌トランソニックの発行，ニューミュージック・メディアの開催などといったところがいくつかの主だったものでしょうか。

音楽教育について

―― さて，いろいろと一方的におうかがいいたしましたが，最後に音楽教育についてちょっとお聞きしたいのですが，先生お子様はいらっしゃいますか。

一柳 います。小学校四年です。

―― そうすると子供の音楽教育についてもあるイメージみたいなものをお持ちでしょうね。

一柳 音楽の将来がどうなるか，ということは大変むずかしい問題で，芸術がこれまでのようなかたちで存続するかどうか，ということもわからないわけです。ですから音楽をおしつける，というような教育だけはしたくないと思っていますが。

―― 自分の子供は教えられない……？

一柳 いやそうではなくて……。世の中はどんどん変わって行きますから，どんな時代にも対応できるような基礎的な部分は親としても与えられると思うんです。それともっと**開放的な音楽教育が必要**ではないか，ということです。つまりクラシックだけではなく，世界中のいろいろな種類の音楽を知ったり学んだりしてゆくなかで，１人１人の人が自分で音楽をみつけ出してゆけるような開放的な状況をつくってあげることですね。現在の音楽界というのは特殊部落みたいなもので現代社会との間にギャップをつくっていますからね。

―― 確かに日本では音楽家の社会的地位はものすごく低いですね。

一柳 ええ，低いですね。(笑)これは音楽家の意識の問題もあると思いますが。ヨーロッパやアメリカでは新しく育ってきた人たちは，自分も音楽界の一員と成ることを音楽家として生きる意義につなげて考えているようですが，日本の場合は全く違いますね。ただそれは一概には悪いとはいえない。日本には日本なりの在り方というものがあるわけですから，むしろこれからはそのあたりの違いをはっきり認識し，それをどう創造的なものへ転化してゆくか，ということが大事なことになってくるのではないですか。

―― 評論家にもそのそのようなことを意識していただきたいですね。

一柳 がんばってもらいたいですね。

―― 先生をほじくり出せばもっともっといろいろな事が出てきそうですけれど，今日はお時間になりましたので，また改めてお願い致します。今日は本当にどうもありがとうございました。

インタビューを終えて――始終にこにことお話くださる先生。対座していると，純粋，透明，などと言う言葉が頭に浮んできた。７月31日夜の講座が本当に待たれる思いで，生先のお宅を辞した。

お　便　り　その2

恵美和子さまより（仙台市）

――前略―― リリー・クラウス先生を囲む会の記念写真を，お送り下さいまして，誠に有難うございました。とても楽しい会で，本当に出席させていただいたことを感謝申し上げております。厚く御礼申し上げます。

相変らず多忙なもので，写真の整理がなかなかできませんで，大変遅くなってしまいましたが，私の写しました写真，お送りさせていただきます。